

子どもの療養行動における自立のためのめやす(知的発達水準に準じて使用する)

支援する年齢	乳児期		幼児期		学童期(小学生)		思春期前期(中学生)	思春期後期(高校生)	青年期・成人期	
	0-1歳	1~3歳	4~6歳	7~9歳	10~12歳	13歳~15歳頃	16~19歳頃	20歳前後頃~		
本人の目標	到達目標	・療養行動が自分にとって大切なことと、捉えられる			・療養行動をしていれば、友人と同じように過ごせることを理解する		・療養行動を自ら行うことで、友人と同じように過ごせることを理解する	・積極的な療養行動の工夫により、生活の質を高めることができることを認識する		
	発達の特徴と課題	・療養行動が苦痛を伴う体験のみではなく、頑張った体験として意味付けられる		・療養行動が基本的な生活習慣の一部とすることができる ・療養行動に興味を示すことができる	・療養行動が自分にとって必要なことと認識できる	・療養行動を自分に必要なことと認識し、実施することができる	・自分で意思決定を行うために必要な知識と態度を学ぶことができる	・自分で意思決定を行うために、自分にあった情報を自ら探し、理解し、評価した上で、その情報を正しく使うことができる(ヘルスリテラシーの確立)		
	病気・治療に関すること	・基本的信頼関係の獲得		・基本的な生活習慣の獲得 ・自分の感情や意思を表現する	・基本的な生活習慣の獲得 ・自発性の獲得 できることは自分でする	・集団や社会の中で自分を意識する時期 ・「一生懸命、精を出して取り組む」勤勉性の獲得 ・フラストレーション耐性、自制心、役割分担などの能力を高める	・身体的な能力を鍛える ・知覚、認知、記憶、思考の充実 ・仲間との関係を適切につくりあげる ・両親及び養育者からの自立が進む	・「自分とは何か」「自分の役割は何か」など自己を見つめ模索する時期 ・社会の一員として他者と協力し、自律した生活を営む力の育成 ・両親及び養育者から心理的自立ができる ・人間としての性を適切に受け止める	・職業及び将来の目標を明確にする ・自分の性について説明ができる ・アイデンティティの確立 ・他人(異性)と互いに親密な関係性を築くことができる	
	病気の捉え方	・治療や療養行動が否定的な体験とならない	・できたことや頑張ったことを褒めてもらうことで、自分の行動に自信をもつことができる ・身体を大切にするために、できないこともあるということが理解できる(できないことは失敗ではなく、自分の体を大切にするために必要なことと認識できる)		・自分の体のどの部分に病気があるか、知っている ・治療に伴う外見上の違いや創跡に対し、簡単な言葉で説明できる ・受診の理由が言える ・体調不良がわかる	・自分の体のどの部分に病気があるか、知っている ・治療に伴う外見上の違いや創跡に対し、簡単な言葉で説明できる ・受診の理由が言える ・体調不良がわかる	・自分の病気に関連する人の体の仕組みと働きを知っている ・自分の病状や受けている治療内容を理解する ・周囲に協力してもらいたいことを伝えることができる ・自分の病気に関して、必要時に協力が得られるように友人、教師、先輩などへ説明ができる	・正確な病名や病態等が言える ・体調不良時の対応ができる ・受診しなければならない症状がわかる ・自分が処方されている薬の名前、用法、効果、副作用等が言える	・疾患、病態について理解できる ・病状悪化のサインを認識し、それについて対処できる ・成人病院への移行(転科・併診)に向けて、自分で必要な情報収集を行い、主治医と話し合うことができる	・自分の予後や起こり得る合併症、これからの治療方針について理解し、説明することができる ・自分の病気に関して必要時に協力が得られるよう上司、友人、恋人等への説明ができる
	受療行動	・両親及び養育者に説明が繰り返されるのを傍で見ていて、両親及び養育者の安心感から間接的に子どもと医療従事者の信頼関係が形成される		・通院理由を知り、嫌がらずに受診ができる	・自分の病気について質問したり、医療従事者と話すことができる	・自分で主体的に受診することができる ・学校行事への参加等について、医療従事者に相談できる	・病気を含まれた自己について見つめる ・適切な療養生活について自分の意思で決めることができる ・困っていることや悩みを両親及び養育者や親しい人等に相談できる	・生活行動が拡大する中でも「うまくできていること」「工夫が必要なこと」等、自身を評価することができる ・将来的にも「色んなことができる」という見通し(自信)をもつことができる	・成人病院での受診の必要性を理解し、成人病院への受診をすることができる ・成人病院で自分の病気について説明することができる	
	セルフケア行動	・基本的な生活習慣が両親及び養育者と一緒に実施できる ・療養行動を嫌がらずにできる		・基本的な生活習慣が確立できる ・療養行動に興味を示すことができる ・自分に必要な療養行動や医療的ケアを知っている	・療養行動の中で、自分で出来ることをする ・いくつかの選択肢の中から方法を選択することができる	・両親及び養育者と相談し、療養行動を生活に統合させるための工夫ができる ・自分の服薬している薬の名前が言える ・自分専用の病気に関するノート等を用意し、病気の質問や確認事項を記入できる ・体の変化や性について関心を持ち、家族及び養育者や教師、医療従事者等と話ができる	・自分で判断し、状況に合わせた適切な療養行動をとることができる ・内服薬の管理ができる ・飲酒や喫煙等のリスクを理解し、健康的なストレスへの対処が行える ・性・生殖について医療従事者に質問し、理解できる	・生活行動拡大の中で、適切な療養行動を自分で判断して行い、行動を継続していくための工夫を行える ・自分にとって必要な人には、自分の病気や悩みについて話ができる ・飲酒や喫煙などのリスクを理解し、健康的なストレスへの対処が行える ・自己の性・生殖(機能)などの正しい情報を得ることができる		
	性に関すること	・自分の性について意識しない ・戸籍上の性別決定	・大人の性役割への期待や行動により、性自認や性役割の意識が芽生える		・自分の性がわかる ・何が自分の性に適切で、何が自分らしい在り方なのかを探ることができる	・命の大切さ、自分の体は大切なものであるとわかる ・男女のからだの違いについて知ることができる	・性と生殖の仕組みを知ることができる(月経や精通について等)	・受精・妊娠の仕組みがわかる ・異性との関わり方を知ることができる ・性感染症について知ることができる ・性自認の違和や悩みについて相談できる	・ボディイメージの形成と自分のからだへの理解 ・友人、恋人との付き合いのマナーを知る ・避妊方法の理解	・妊孕性/家族計画について考える
	学校生活など	・集団生活を楽しく過ごすことができる		・集団生活を楽しく過ごすことができる ・集団生活の中で自分の体の不調を訴えることができる ・友人との違いに気付く	・集団生活の中で療養行動ができる ・遠足などの体験活動に参加できる ・友人に病気や傷のこと等を聞かれた時の答えを用意する	・学校生活の中で、療養に必要な時に他者から援助を求めることができる ・集団宿泊的行事等に参加できる	・自分の病気や悩みについて何でも相談できる特定の人を見つけることができる ・学校生活の中で療養行動の工夫ができる	・職場等で自分の病気について説明することができる ・職場の中で療養行動の工夫ができる		
子どもとの向き合い方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの疑問や問いかけを受け止め、発達段階に即した方法で必要な事柄を伝えていく。子どもが触れてはならないと感じる領域を作らないよう心掛ける。</li> <li>・子どもを主体とした言葉のやりとりを重視する</li> <li>・子どもの疑問や不安について、聞く姿勢をもち、丁寧に答えることができる</li> <li>・子どもと何でも話し合える関係を作ることができる</li> <li>・病気に向き合う家族の姿勢が、子どもの病気への向き合い方の姿勢となる。(家族が受け入れられない病気を、子どもが受け入れることはできない)</li> <li>・病気以外の子どもの世界を広げる(好きな事、嫌いな事、友人関係、将来の夢、等)</li> </ul>									
養育者	病気・治療に関すること	・病気をもらった子どもと、子どもの病気を受けとめることができる ・母子分離を避け、安定した母子関係を維持する ・困っていることや悩んでいることを、親しい人や医療従事者等に相談できる	・病気だからと特別扱いたくない(きょうだいと同じように、公平に扱う) ・病気に対して良く理解者、協力者を作るよう努める ・家族で病気のことを話さときは、きょうだいにききちんと伝える ・予防接種を適切なタイミングで受ける	・病気や治療に関する知識、生活上の注意点、セルフケア等について、子どもが理解できるように説明を開始する ・可能な限り同年代との活動や遊びの機会を増やす ・正しい病気の理解を本人に促す必要性を理解し、説明方法や時期等を医療従事者と相談する ・子どもの問いかけを避けることなく、答える姿勢をもつ ・子どもの「できない」ことによる自己不全感や自信のなさの表出に耳を傾ける。(小さな「できた」や得意なことをしっかりほめる)	・両親及び養育者から子どもに病名・病態を伝える(医師から説明した方がよい場合は、医師に相談する) ・説明を聞いた子どもが、病気、治療についてどのような認識を持っているか確認し、補足する ・本人を信頼し、任せていく覚悟をする ・服薬や治療への抵抗が生じた場合には、その背景にある子どもの気持ちや想いを考え解決策を模索する ・子どもの不安や疑問を見逃さず受け止め、丁寧に応じていく	・必要なケア、医療行為に関しては、見守りながら子どもに行わせる ・「自分はどうして病気なのか」といった深刻な悩みも生じやすい時期であるため、子どもから表出があった場合には、病気や体について話し合う良い機会と捉え、時間をかけ向き合うようにする	・子どもに関心を持ち、自己流や治療拒否の兆候を早めに把握し、医師に相談する ・子どもの言動を見守る ・治療の選択の際など、両親及び養育者の価値観や選択肢を押し付けることなく、子どもの考えや意見を聞く姿勢を心掛ける	・療養生活について、子どもの自己決定を見守り、必要に応じて助言する		
	セルフケア行動の促進	・内服薬の量や回数、副作用について薬剤師に確認し、管理する ・薬であることを伝え、内服させる ・内服できたらほめる	・いずれは子どもが服薬管理をすることを意識しながら関わる	・服薬管理は見守りながら子どもに行わせる ・セルフケアに関して、不必要に口を挟んだり代わりにしない	・子どもの病状と年齢に見合った規則正しい生活習慣ができるように支援する ・子どもができる療養行動は子どもに任せ、見守り支援を行うようにする	・基本的には子どもに自己管理させるが、子どもの言動を見守る姿勢をとる	・子どもが羽目を外すことがあっても、自分でコントロールができるかどうかを判断し、子どもにとって必要な経験ができるようサポートする			
	就学・就職	・保育園に通う前に、健康に関するニーズを医師と確認し、保育士に伝える	・小学校に通う前に、健康に関するニーズを医師と確認し、教師に伝える	・中学校に通う前に、健康に関するニーズを医師と確認し、教師に伝える内容を本人と確認する	・高校に通う前に、健康に関するニーズを医師と確認し、教師に伝える内容を本人と確認する	・患者と一緒に将来のことについて考えている				